

## イベント

## 2022年度北東アジア経済発展国際会議 (NICE) イン新潟 「分断が進む世界経済—つながりを求めて」

日 時：2022年12月1日(木)、12月16日(金)

開催方式：会場、オンライン(同時 Web 配信)

主 催 NICE 実行委員会(新潟県、新潟市、ERINA)

後 援 外務省、経済産業省、国土交通省、新潟大学、駐日モンゴル国大使館、駐新潟大韓民国総領事館、中華人民共和国駐新潟総領事館、一般社団法人日本経済団体連合会、一般社団法人東北経済連合会、一般社団法人新潟県商工会議所連合会、一般社団法人新潟県経営者協会、新潟経済同友会、日本海沿岸地帯振興連盟、公益財団法人にいがた産業創造機構、一般社団法人新潟青年会議所、独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)、独立行政法人エネルギー・金属鉱物資源機構、一般財団法人日本エネルギー経済研究所、一般財団法人石炭フロンティア機構、一般社団法人ロシア NIS 貿易会、株式会社国際協力銀行(JBIC)、石油連盟、一般社団法人日本プロジェクト産業協議会、世界省エネルギー等ビジネス推進協議会、新潟日報社、毎日新聞新潟支局、読売新聞新潟支局、産経新聞新潟支局、朝日新聞新潟総局、日本経済新聞社新潟支局、共同通信社新潟支局、時事通信社新潟支局、NHK 新潟放送局、BSN 新潟放送、N S T 新潟総合テレビ、TeNY テレビ新潟、UX 新潟テレビ21、NCV(株)ニューメディア、FM 新潟77.5、FM KENTO

参加者数 国内外約320人(うち国外:約30人 中国、韓国、モンゴルほか)

### <プログラム>

#### ■第1日目

開 催 日：2022年12月1日(木)

開催方式：会場、オンライン(同時 Web 配信)

会 場：朱鷺メッセ4階マリナーホール

使用言語：3カ国語(日英中)同時通訳

##### ■開会(10:30~11:00)

主催者挨拶	新潟県知事	花角英世
	新潟市長	中原八一
	NICE 実行委員長・ERINA 代表理事	河合正弘
来賓挨拶	外務省欧州局日露経済室長	石川亘*
	経済産業省通商政策局北東アジア課課長補佐	柏原直明*

##### ■特別講演(11:00~12:00)

「分断が進む世界における日本の役割」

宮本アジア研究所代表、元駐中国特命全権大使 宮本雄二\*

##### ■経済安全保障セッション「世界経済の分断は回避できるか?—危機の時代の経済と安全保障」(13:30~15:30)

#### <パネリスト>

東京大学公共政策大学院教授	鈴木一人
ブルッキングス研究所東アジア政策研究センター(CEAP)所長	ソリス・ミレーヤ
中国社会科学院日本研究所長	楊伯江*
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授	服部倫卓

<コーディネーター>

NICE 実行委員長・ERINA 代表理事

河合正弘

- 農業・食料セッション「農産物貿易の将来展望と北東アジアへのインプリケーション」(15:45～17:45)

<パネリスト>

国際食糧政策研究所 (IFPRI) 主任研究員

マーティン・ウィル

株式会社農林中金総合研究所理事研究員

平澤明彦

中国人民大学教授

唐忠\*

香港貿易発展局日本首席代表

ヤウ・ベンジャミン

アクセンチュア株式会社シニアマネジャー

小栗史也

<コーディネーター>

ERINA 調査研究部長・主任研究員

新井洋史

- クロージング・リマーク (17:45～18:00)

NICE 実行委員長・ERINA 代表理事

河合正弘

■第2日目

開催日：2022年12月16日(金)

開催方式：会場、オンライン(同時 Web 配信)

会場：朱鷺メッセ4階マリンホール

使用言語：2カ国語(日英)同時通訳

- 開会挨拶 (10:30～10:35)

NICE 実行委員長・ERINA 代表理事

河合正弘

- 第4回 Future Leaders Program (FLP) (10:35～12:00)

—北東アジア地域の未来シナリオ—

- エネルギー・環境セッション「共に目指すカーボンニュートラルの実現」(13:30～15:30)

<パネリスト>

アグラ・エナギーヴェンデ欧州エネルギー政策統括部長

ブック・マティアス\*

モンゴル環境観光省気候変動研究協力センター主席科学顧問

バトジャルガル・ザンバ

ソウル大学校客員教授、UNFCCC パリ協定第6条4項監督委員

呉大均(オ・デギョン)

欧州森林研究所主席科学研究員

サフォーノフ・ゲオルギー\*

一般社団法人海外環境協力センター(OECC)研究員

渡辺潤

長岡技術科学大学大学院情報・経営システム系教授

李志東

<コーディネーター>

ERINA 調査研究部主任研究員

エンクバヤル・シャグダル

- FLP 表彰式 (15:45～16:15)

- 総括講演 (16:15～17:00)

「分断が進む世界経済—北東アジア地域の課題と展望」

NICE 実行委員長・ERINA 代表理事

河合正弘

\*オンライン参加

本稿は、「2022年度北東アジア経済発展国際会議イン新潟」の内容を当日の録音および資料をもとにまとめたもので、文責は ERINA にある。関係各国名は中華人民共和国を中国、朝鮮民主主義人民共和国を北朝鮮、モンゴル国をモンゴル、大韓民国を韓国、ロシア連邦をロシアとそれぞれ表記した。

# FY2022 Northeast Asia International Conference for Economic Development (NICE) in Niigata

## Program

### “An Increasingly Divided Global Economy: In Search of Connections”

#### Organizers

NICE Executive Committee (Niigata Prefecture, City of Niigata, and ERINA)

#### Sponsors

Ministry of Foreign Affairs of Japan; Ministry of Economy, Trade and Industry;  
Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism; Niigata University; Embassy of Mongolia in Japan;  
Korean Consulate in Niigata; Consulate-General of the People’s Republic of China in Niigata;  
KEIDANREN (Japan Business Federation); TOHOKU ECONOMIC FEDERATION;  
Federation of The Chambers of Commerce & Industry of Niigata Prefecture; Niigata Employer’s Association;  
Niigata Association of Corporate Executives; The League of Japan Sea Coastal Promotion; Niigata Industrial Creation Organization;  
JUNIOR CHAMBER INTERNATIONAL NIIGATA; Japan External Trade Organization;  
Japan Organization for Metals and Energy Security; THE INSTITUTE OF ENERGY ECONOMICS, JAPAN;  
Japan Coal Frontier Organization (JCOAL); Japan Association ROTOBO; Japan Bank for International Cooperation;  
Petroleum Association of Japan; Japan Project-Industry Council; Japanese Business Alliance for Smart Energy Worldwide;  
The Niigata Nippo; Niigata Bureau, The Mainichi Newspapers; Niigata Bureau, The Yomiuri Shimbun;  
Sankei Shimbun Co., Ltd. Niigata branch Office; The Asahi Shimbun Niigata General Bureau; Niigata Bureau, Nikkei Inc.;  
Kyodo News Niigata Bureau; JIJI PRESS Niigata bureau; Japan Broadcasting Corporation, Niigata Station;  
Broadcasting System of Niigata Inc.; NST Niigata Sogo Television, Co., Ltd.; Television Niigata Network Co., Ltd.;  
The Niigata Television Network 21, Inc.; NEW MEDIA CORPORATION; FM-NIIGATA 77.5; FM KENTO

#### Participants

A total of approximately 320 persons (inclusive of 30 persons from overseas: China, ROK, Mongolia, et al.)

## ■ Day 1

*Date: 1 December 2022 (Thursday)*

*Method: Hybrid (Combination of Real and Online delivery)*

*Venue: 4th Floor “Marine Hall”, Toki Messe (Niigata International Convention Center)*

*Languages: Simultaneous Interpretation in Japanese, English and Chinese*

#### □ Opening Addresses (JST 10:30 to 11:00)

Organizers’ Welcome Addresses

HANAZUMI Hideyo Governor of Niigata Prefecture

NAKAHARA Yaichi Mayor, City of Niigata

KAWAI Masahiro Chairperson, NICE Executive Committee; Representative Director, ERINA

Guest Addresses

ISHIKAWA Wataru\* Director, Japan-Russia Economic Affairs Division, European Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs

KASHIWABARA Naoaki\* Principal Deputy Director, Northeast Asia Division, Trade Policy Bureau, Ministry of Economy, Trade and Industry

#### □ Special Address (JST 11:00 to 12:00)

“Japan’s Role in an Increasingly Divided World”

MIYAMOTO Yuji\* Chairperson, Miyamoto Institute of Asian Research; Former Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary to the People’s Republic of China

#### □ Economic Security Session “Can We Avoid Division of the Global Economy? — Economy and Security in Times of Crisis” (JST 13:30 to 15:30)

<Panelists>

SUZUKI Kazuto Professor, Graduate School of Public Policy, the University of Tokyo

SOLIS Mireya Director, Center for East Asia Policy Studies (CEAP), the Brookings Institution

- YANG Bojiang\* Director-General, Institute of Japanese Studies, Chinese Academy of Social Sciences (CASS)  
 HATTORI Michitaka Professor, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
- <Coordinator>  
 KAWAI Masahiro Chairperson, NICE Executive Committee; Representative Director, ERINA
- Agriculture and Food Session “Outlook for Agricultural Trade and Implications for Northeast Asia” (JST 15:45 to 17:45)
- <Panelists>  
 MARTIN Will Senior Research Fellow, International Food Policy Research Institute (IFPRI)  
 HIRASAWA Akihiko Research Counselor, Norinchukin Research Institute Co., Ltd.  
 TANG Zhong\* Professor, Renmin University of China  
 YAU Benjamin Director, Japan, Hong Kong Trade Development Council (HKTDC)  
 OGURI Fumiya Senior Manager, Accenture Japan Ltd
- <Coordinator>  
 ARAI Hirofumi Director and Senior Research Fellow, Research Division, ERINA
- Closing Remarks (JST 17:45 to 18:00)  
 KAWAI Masahiro Chairperson, NICE Executive Committee; Representative Director, ERINA

## ■ Day 2

*Date: 16 December 2022 (Friday)*

*Method: Hybrid (Combination of Real and Online delivery)*

*Venue: 4th Floor “Marine Hall”, Toki Messe (Niigata International Convention Center)*

*Languages: Simultaneous Interpretation in Japanese and English*

- Opening Address (JST 10:30 to 10:35)  
 KAWAI Masahiro Chairperson, NICE Executive Committee; Representative Director, ERINA
- The 4th Future Leaders Program (FLP) (JST 10:35 to 12:00)  
 —Future Scenario of Northeast Asian Region—
- Energy and Environment Session “Together for Carbon Neutrality” (JST 13:30 to 15:30)
- <Panelists>  
 BUCK Matthias\* Director Europe, Agora Energiewende  
 BATJARGAL Zamba Chief Science Advisor, Climate Change Research and Cooperation Center, Ministry of Environment and Tourism of Mongolia  
 OH Daegyun Visiting Professor, Seoul National University;  
 Member, Supervisory Board of UNFCCC Paris Agreement Article 6.4  
 SAFONOV Georgy\* Principal Scientist, European Forest Institute  
 WATANABE Jun Researcher, Overseas Environmental Cooperation Center, Japan (OECC)  
 LI Zhidong Professor, Graduate School, Department of Information and Management Systems Engineering, Nagaoka University of Technology
- <Coordinator>  
 ENKHBAYAR Shagdar Senior Research Fellow, Research Division, ERINA
- FLP Awards Ceremony (JST 15:45 to 16:15)
- Closing Address  
 “The Increasingly Fragmented Global Economy: Challenges and Prospects for Northeast Asian Economies” (JST 16:15 to 17:00)  
 KAWAI Masahiro Chairperson, NICE Executive Committee; Representative Director, ERINA

\*Online participant

**〈特別講演〉****「分断が進む世界における日本の役割」**

宮本アジア研究所代表 宮本雄二



本日の「分断が進む世界における日本の役割」というテーマは、日本と中国の関係を世界という大きな舞台から見なければ正確な日中関係は掴めない、というこれまでの私の論理的枠組みの説明にもなるかと思う。

**1. 現行国際秩序は人類の叡智の結晶****(1) 平和と発展を可能とした戦後国際秩序**

現行の国際秩序は人類の叡智の結晶である。第2次大戦が終わる前からルーズベルト大統領は戦後の世界秩序はどうあるべきか、優秀な人材に政治、経済の各観点から検討を命じ、それを踏まえていわゆる「戦後国際秩序」というものを打ち出した。その前提となったのは第1次・第2次世界大戦からもたらされた人類の壮絶なる悲惨な結果をくり返してはならない、すなわち、戦争を二度と起こしてはならず、経済は持続的に発展できるような国際関係を作らなければならない、という明確な意思でありそれを基に作り上げたのが戦後国際秩序である。

それまでの基本は強者が勝つ、強者が全部取る、まさにジャングルの掟であった。これを、そうではないように変えることによりやく成功したというのが、第2次世界大戦後の秩序だ。

実は、類似の試みはヨーロッパにおいて、第1次大戦後に行われたがこれは失敗した。その失敗をもたらした張本人の一人が日本であったという現実、我々は深く反省する必要があると思う。

**(2) 平和と発展を担う仕組みの構築**

国連という新たな組織を作り、平和を担わせようとした。しかし、米ソ冷戦が戦後、直ちに始まったため、それを前提としていた国連のメカニズムが効かなくなった。そのため、基本的な平和そのものは、米国の同盟関係及びソ連の同盟関係の併存

というかたちで担われた。そして冷戦は終わる。ただし、国連の活動は正当に評価されるべきだと思う。国連があるおかげで、何が正しくて何が正しくないかを世界が一致して示す場がある。今回のロシアのウクライナ侵攻もまさに、国連がそれに対して「ノー」を出す、すなわち、世界の世論がどこにあるかということを示す、極めて貴重な場を提供したし、平和維持活動で国連が果たした役割というのは、比較にならないくらい大きい。それ以外にも人道援助も含め、国連の関係諸機関が世界の平和と人類の福祉のために大きな役割を果たしているということは、認識すべきであろう。いわゆるブレトンウッズ体制によって自由な経済活動が担保された。戦前は自由な経済活動を制限したことによって、ドイツも日本もさらなる侵略に進んでいったという側面がある。従って、経済をそういうものにしてはいけない。資金の流れを安定させ、自由な貿易ができる体制を作る必要があるということで、ブレトンウッズ体制という戦後国際経済秩序ができあがった。

その国際経済が、東西冷戦が始まった時、ソ連圏とそれ以外のところが完全に分断していた。いわゆる開発途上国といわれる第三世界はどちらも貿易をしていたが、西側とソ連圏は完全に対立と分断しており、これが冷戦=対立と分断だ。それが終わることによって、西側主導の現行国際秩序が、旧ソ連圏も含めてあまねく世界を覆った。真の意味での経済のグローバル化が実現し、その結果世界は未曾有の発展を遂げている。それは平和があったからであり、それを支えたのは、実は米国の力であったという現実を認識しておく必要がある。

**(3) 東西冷戦構造の終焉と現行国際秩序の普遍化**

こうして、現在の国際秩序は全世界に及んだ。だが現在、大きな挑戦を受けている。その最大のものが中国から来る。

1972年に米中の関係改善があり、それは日本と中国の国交正常化につながっていく。それがアジアにおける東西の冷戦構造を無くし、平和を実現し、経済の自由な動きが実現した。そのことにより、アジアの奇跡の発展となり、中国の発展となり、いまやインドの発展となっている。何よりも平和を確実にすることによってしか、国際社会は発展することができない。そのために、現在の国際秩序がいかに重要か、いかに重要な役割を果たしているかということ、を、まずは理解して頂きたい。

**2. 現行国際秩序は深刻な挑戦に直面****(1) 経済のグローバル化に対する挑戦**

経済のグローバル化は国際社会から厳しい批判を受けている。グローバル化をやったから移民が増えた、仕事が奪われた、という声が増えてきたが、この議論は通らない。それはグローバル化の結果というよりは、各国の政策の問題であり、グローバル化の意義にかわりはなく、その評価を憂えてはいけない。だが経済安全保障がもたらすデカップリング作用が経済の分断の方向にますます大きな影響を与えている。

経済、軍事安全保障、政治外交という国際関係の柱があるが、それぞれの正しい論点を調和シトータルで考えなければならないと思っている。

安全保障のためにやるべきことはやるといふ議論に反対するつもりはない。しかし、安全保障は常に相手を過大評価することになる。自分のわからない部分はすべて、最悪のシナリオを想定し、それに従って対応しようとする。常に相手を過大評価することになり、その対抗措置も同じようなロジックで作られるので、受けたほうは自分に対する脅威の増大と考える。すなわち、軍拡競争が始まる。軍拡競争が始まると、人類の歴史では、ほぼ例外なく戦争で終

わっている。今日の世界において軍事力の基礎は実は経済であり、軍事力も経済も科学技術によって支えられているというのは自明の理だ。ある意味、科学技術を軍事安全保障の世界から切り離せないが、これを管理することによって、科学技術がある意味で軍事安全保障に対し中立化することも考えて、真剣に管理することをしないと、この軍事安全保障の配慮がますます経済に影響を及ぼし、経済のロジックが働かない世界が広まってくのではないかと憂慮する。グローバリゼーションは経済のロジックで出来上がったものなので、経済のためにはこれは続けていかざるを得ない。しかし、安全保障の問題があるということで、これまでのものをバージョン1とすると、有識者にグローバリゼーションの基本は維持して軍事安全保障、サプライチェーンの問題などをうまく包括した形でのグローバリゼーションバージョン2をぜひ考えていただきたいと思っている。

## (2) 世界平和に対する挑戦

政治の分野では世界平和に対する挑戦が起こっている。ロシアのウクライナ侵攻は現行国際秩序に対する重大な挑戦だ。もちろん、ロシアにも言い分はある。すなわち NATO の東方拡大はソ連崩壊直後からロシアにとって最大の安全保障の問題だった。それがロシアに不利に展開しているということでロシアが挽回しようとするのは、動機として理解できるが、しかしながら、国際連合安全保障理事会の常任理事国であるロシアが国際連合憲章に書いてあることを明々白々侵犯するということは、重大な、現行国際秩序に対する挑戦以外の何ものでもない。従って、国際社会が現行国際秩序を守るための行動は基本的に正しいし、続けていかざるを得ないと思う。

もう一つの世界平和、現行国際秩序に対する挑戦は中国の台頭であることは間違いない。すなわち、中国がここまで台頭してきて自分たちの主張を貫くようになり、その主張がこれまで我々が考え想定していた現行国際秩序の考え方に対して異論を唱えているという意味で、これは間違いなく現行国際秩序に対する挑戦になっている。しかもロシアのウクライナ侵攻を中

国が支持したと受け取られて、中口対西側という冷戦構造の復活が議論されるようになった。しかしながらそれは、時期尚早だろう。西側が主導する現行国際秩序があり、中口がそれに対する対抗勢力だと認識されていることは事実だ。よく、第三世界、グローバルサウスといわれるが、ここは基本的に自分たちの立場を明確にするということではなくそれぞれの二国間関係、それぞれの国の利益を踏まえて、西側、あるいは中口の立場を支持したりしなかったりという状況だと思うので、基本的対立構造は西側対中口だ。

この西側とは、欧米と日本（+カナダ、豪州、韓国）だ。しかし、ここに参加している欧州は東西冷戦、米ソ冷戦の時の旧東欧とソ連の一部だった国々も参加している。したがって、この西側は東西冷戦の時代よりもはるかに強い大きな西側になっている。そしてこの西側が一つになると、経済圏は中口の3倍以上であろう。そうなると、実は国際秩序が大丈夫なのかと心配する議論の前提として、西側はこれだけ強くなっているものであり、西側の団結さえ維持できれば、中口の挑戦に対して我々は十分対抗できるという自信を持つべきであろう。

中口は一枚岩ではない。ロシアは現行国際秩序に挑戦しているだけであり、それに代わるものも理念も何も出していない。それらしきものを出しているのは中国だけだ。

## 3. 中国の台頭は現行国際秩序に何をもたらすのか？

### (1) 中国は変化、変革のプロセスの真ただ中にある！

「中国は100年計画をもって世界を制覇しようとしている」(M. ピルズベリー『China 2049- 世界覇権100年戦略』) というが、果たしてそうなのか？ 現実には、そういう100年戦略を考えるような余裕は中国にはなかった。それを考える余裕ができたのは、習近平になってからだ。習近平は2049年の建国100周年を念頭に置いて、2035年まで、2050年までにどうするか、中国共産党の決定として米国を抜きたいと思いついた。具体的計画を打ち出した。しかし、我々が考えておくべきことは、中国が新たな問

題や現実と直面したら、対米関係も含めてまた変えてくるということだ。中国は変革する力を持っている。これが中国共産党の最大の力である。中国は1978年の改革開放以来、ガバナンスに「改革」が組み込まれている。中国が変わらないという前提に立つと、中国側が米国の圧力に屈し妥協するか、あるいは対立を続けて分断するかを選択肢しかなくなる。逆に言うと、中国をそこに追い込むことになるので、この政策は二重の意味で間違っている。

習近平が2012年に政権を取り、新しい中国を始めた。それは鄧小平式改革開放政策が一つの大きなボトルネックに到達していた時だ。経済はうまくいったが、中国共産党のガバナンスにおいて大きな問題を残していた。一つは腐敗、もう一つはガバナンスの非効率性。さらに、鄧小平は経済発展のことは言ったが、経済発展後の中国をどうすべきかについては何も語らなかった。そういうものを埋めるために、習近平は権力を自分に集中し、腐敗を打破し、新たなガバナンスのシステムを今、創り出し、その拠り所としての習近平思想を打ち出していった。これはある意味、党に対する時代の要請であった。権力を重視し、管理を重視し、上からの締め付けを強化するというやり方を今、やっている。

### (2) 中国は現行国際秩序の擁護者であり破壊者ではない！

中国は現在の国際秩序に残るということはずっと決めていた。一時期動揺がなかったとは言わないが、中国共産党の公式の決議においては国際秩序を破壊することは一度も出ていないし、基本的には国際秩序を擁護することで一貫している。習近平は今回の党大会で国際秩序の擁護を全面的に打ち出した。それは考えてみれば当然で、中国が今日まで発展し、豊かになり、国際的な地位と影響力を強めたのは、現行国際秩序のおかげだ。その中国が現行国際秩序を破壊すること自体が論理的に成り立たない。

現行国際秩序を支えている理念と原則。それを支えるたくさんのルール、仕組。これに代わるものを人類はまだ誰も思いついていない。ましてや中国。私は、水平線の彼方にも、現行国際秩序に代わる

ものは見えてきていないと思っている。やりたくても中国にできるはずがない。よって、まず壊す利益がない。やりたくてもやる力もない。そういう状況なので、自然の結論として現行国際秩序を受け入れる。

しかしながら、自分に都合のいいように変えていこうとしている。したがって、中国は現行国際秩序を前提として、その改善と強化を中国に有利な形で進めていくという一連の結論に達する。これを習近平総書記は次のように総括している。すなわち、国際政治秩序に関しては、国連を中心とする国際システム、国際法を基礎とする国際秩序および国連憲章の趣旨と原則を基礎とする国際関係の基本ルールを護持。同時に、中国の価値観や提案を取り入れることで、秩序自体の民主化と公正化を実現することを要求。これが、現在の中国の立場だ。

### (3) 中国に改めるべきことが多々あることも事実

中国が西洋文明とがっぶり四つに組んだのは1978年、正確には1979年以降だ。従って、中国社会における西洋文明の理解はまだ浅い。西洋の考え方を正確に理解できてない。どういふふうな話し方をすれば西洋の人がそれを受け入れるかもわかってないので、自分の考え方を自分のロジックで世界に発信しているのが、中国の現状だ。中国人は必死になって世界のことを学び、世界の人が分かるロジックと言葉で説明することを一刻も早く身につけないと、中国の主張は引き続き西側から理解されないし、西側の主張も引き続き正確に理解できないという状況が続くだろう。われわれからは中国の言動と、現場での行動が一致していない。そのギャップを埋める努力をしない限り、中国の言うことは西側主導の世界から信用されない。信用されなければ、中国の影響力も発信力も強くはないと言いつけるべきだ。

中国と近隣諸国をはじめとする国際社

会、特に西側との関係悪化の最大の要因は、軍事力の急速な増強にある。それに対する十分な説明を中国は一度もしていない。透明性が欠落している。最近に至っては、「大国はそれにふさわしい軍事力を持つのが当然だ」という理屈だ。したがって中国が米国の経済レベルに到達すれば、米国と同じ軍事力を持つのは当然だということになる。このロジックだと、中国の軍事力は間違いなく脅威と認識されてしまう。その結果、中国への不信心、疑念がたまっているのは事実だ。

### 4. 現行国際秩序の護持と強化のために日本がなすべきこと

中国は現行国際秩序の護持、強化を図るということを表明している。もちろん、それが中国の有利な形になるようにする、ということであろう。ただ、それは当たり前のことだ。

世界中のすべての国が現行国際秩序について自国に有利になるようにするというのはすべての国が考えることだ。中国がそう考えても何の不思議もない。ただ現行国際秩序を護持し、それを改善強化するという抽象的な目的が一致していれば、それはそれで国際社会の協働は始められる。そのための努力を日中は始めるべき時に来たと思える。そして、日中が現行国際秩序を護持し、強化するための共同作業に入る。この作業には当然、米国、欧州、ASEANも入れなければいけない。しかし、まず日中でやってもいいと私は思う。そうすることで現行国際秩序の理念と原則をしっかりと確認しながら、より現実にあった、より効果のあるより大きな役割を果たせる現行国際秩序に変えていくべきであろう。

この世界の分断が進む中で日本が果たすべき役割のもう一つは、先ほど西側対中口と申し上げたが、西側の団結が今ほど必要な時はない。逆に、団結をしていけば、西側主導で現行国際秩序をさらに維

持し強化していくことは可能だ。そのプロセスの中に中国を入れていく。もちろん中国の言うことも聞かなければならない。しかし、中国の方がより多く我々の言うことを聞くことになるだろうと思う。いずれにせよ、そのような努力が必要だ。

その中核はG7であり、その中で日本は積極的に現行国際秩序を断固として護持し、いかにしたら強化できるか不断のアイデアを出し続けることをしなければならぬ。それを西側の意見とし、その上で中国とも話し、そうすることで世界がより大きな方向で進んでいく、そういう時代を作ることが可能ではないだろうか。

それは日本のソフトパワーの強化だ。日本と中国の物理的な国力はますます差がついてくる。そういうなかで日本の存在感、影響力を保持する唯一無二の方法がこのソフトパワーの強化だと思っている。従って、この大きなソフトパワーを堅持するために、日本社会として知恵を出す仕組みを作らなければいけないと思う。それは、外交力だ。私は、外交のソフトパワーも非常に重要になったと強く自覚している。この外交とは外務省の外交ではない。日本国の外交である。日本国が全体としてそういう重厚な力強い外交をできるような体制に、ぜひなってほしい。このような体制になれば、日本は長期にわたり存在感を維持できる。

中国の観光客が多く日本を訪れ、中国人は日本社会の平和で安定した安心できる生活に感動して帰っていく。高い文化水準を体現した日本社会に自分たちの将来の夢を結び付けているのだ。そこには日本社会への敬意が生まれる。それは間違いなく日本のソフトパワーだ。このソフトパワーの強化に力を注ぐべきだと思う。

世界の分断を避けるために、場合によっては中国と力強く手を組んで、国際社会に大きな地歩を築く、これが今後の日本のあるべき姿だと思う。

## 〈経済安全保障セッション〉 「世界経済の分断は回避できるか？—危機の時代の経済と安全保障」

米国でのトランプ政権発足などを契機として、世界経済は米中の戦略的競争を軸に分断の時代を迎えようとしていた。さらに、新型コロナウイルスの感染拡大も人と人の国際交流を大きく制限し、世界やアジア地域のサプライチェーンの機能を低下させていた。そこに2022年2月のロシアによるウクライナへの軍事侵攻開始が加わったことで、西側の安全保障上の危機が高まり、ロシアに対する西側の経済・金融制裁は米中競争とは異なる切り口で世界経済を分裂させる事態を生じさせている。

このように、今回のNICEは、経済安全保障の確保が各国の重要な政策課題となっている中で開催された。そこで、本セッションでは、①米中の戦略的競争とサプライチェーンのデカップリングの可能性、②ロシアのウクライナへの軍事侵攻と米欧日による対ロシア経済・金融制裁、③主要国の経済安全保障政策の3つの論点に焦点を当てつつ、いかにすれば世界経済の分断を回避できるかについて議論を深めることを目指した。

セッションの進行は、まず日米中から招いた計4名の専門家からそれぞれ10分程度の発言をいただき、引き続いてコーディネーターを務めた河合正弘(NICE 実行委員長・ERINA 代表理事・所長)から各パネリストに質問を投げかける形でディスカッションを行った。最後に、オンライン参加者も交えたフロアとの質疑応答を行った。以下、順を追って発言のポイントをまとめていくこととする。

一巡目の報告の最初に登壇したのは、鈴木一人東京大学公共政策大学院教授である。「経済安全保障がもたらす新たな秩序」と題した発言の中で、経済安保とは、経済的合理性和戦略的合理性のバランスや強弱を巡る問題であるとの考え方を示したうえで、そこでは経済合理性で動く企業の論理と戦略的合理性を考える政府の論理が必ずしも合致しないことを指摘した。また、2022年10月に米国が導入した、中国向け半導体輸出規制の事例を取り上げながら、米国と中国が相互依存の関係を認識しつつも、特定の分野に限って

規制を導入する形になっているとの現状認識を披露した。

次に、米国のブルッキングス研究所東アジア政策研究センター(CEAP)所長のソリス・ミレヤ氏が「米中の戦略的競争—アジアの地経学への含意」というテーマで、主に米国の政策の考え方を紹介する報告を行った。ソリス氏の現状認識は、鈴木氏のそれに近いものであった。具体的には、最近の米国の政策は、経済と国家安全保障の両面を考慮したものになってきていること、中国との間での完全なデカップリングを目指してはいないことなどを指摘した。また、米国が主導するインド太平洋経済枠組(IPEF)は、中国との競争を意識して経済連携を強化しようとするものであるが、市場開放措置が無いといった限界があるとの指摘もなされた。

三番目の発言者は、オンライン参加した楊伯江中国社会科学院日本研究所長で、「ハイレベルな対外開放による質の高い発展の促進」と題して、中国政府の方針及び日中間を中心とする中国の国際経済関係の現状を説明した。2022年10月の中国共産党第20回全国代表大会では、「中国式現代化」を実現して経済と社会の「質の高い発展」を推進するため、安定的成長、バランスの取れた発展、イノベーション型駆動を実現するといった方針が示された。経済安全保障リスクは様々なものの、2022年の主要貿易相手国との貿易額は軒並み増加している。唯一、日本との貿易は減少しているが、ヘルスケア産業やRCEP枠内での協力、第三国市場での協力など、日中間の協力には有望分野があることに期待を表明した。

一巡目の最後に、服部倫卓北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授が「制裁下のロシアの貿易パフォーマンス」について、自らの評価を発表した。前半では、ロシアが公式の貿易統計の公表を停止しているなかで、独自集計したデータに基づき、中国、インド、トルコ、カザフスタンなど特定の国々と、特定の分野での貿易が増加している状況を説明した。ロシア経済の今後について、短期的には持ちこ

たえることができるだろうが、長期的には厳しいとの見通しを示した。

以上の各パネリストからの発言の後、コーディネーターとの間で質疑応答が行われた。

鈴木氏に対する河合コーディネーターの質問の1点目は、経済安全保障上、同盟国や友好国に対しても過度に依存しない方が良いのかというものであった。これに対して鈴木氏は、画一的な正解は無く、リスクの大小を考慮しながら総合的に判断すべきものだとして回答した。2点目の論点は、米国が導入した先端の半導体の輸出管理措置であり、輸出管理が半導体以外の技術にも広がる可能性があるかという質問に対し、その可能性はあるが、無制限に広がるわけではなく、安全保障に直結するものに限られるだろうとの見通しを示した。

ソリス氏に対しては、米国が導入した輸出管理政策は米国が一方的に実施しているように見えるが、同盟国、友好国と一緒に考えた方が有効ではないかとの問題提起をした。これに対してソリス氏は、複数国での輸出管理には難しさもあるものの、効果が大きいという点について同意した。その上で、今回の措置に関し、米国は同盟国との間で数か月間にわたって情報共有してきたので、それらの国々の側に驚きはなかったはずだと説明した。もう1点、IPEFの性格も議論の対象となった。河合コーディネーターは、楊氏が「IPEFは経済的な道具ではなく、政治的な道具ではないか」といった発言をしたことを引き合いに、ソリス氏の考え方を尋ねた。これに対してソリス氏は、そもそも自由貿易協定(FTA)など経済連携に関わる枠組みは政治的でも経済的でもあると答えたうえで、IPEFを通じて女性や若者の人材育成などが実現していくことなどに期待を示した。

楊氏に対しても2点の質問があった。最初の質問は、中国は2050年ころに向けて、どのような国際経済秩序を目指しているのかという根本的な問いであった。楊氏は一言で表現するのは難しいとしつつも、備



えるべき特徴をいくつか指摘した。例えば、公平で平等な形で各国が協議しながら共同で構築すべきものであることや先進的な理念を持つ必要があることなどを挙げた。もう一つの質問は、足もとのゼロコロナ政策の見通しを尋ねるもので、楊氏の説明は、現在の政策は正しくは「ダイナミック・ゼロコロナ」政策、すなわち動的なプロセスを経てゼロを目指すものであって、中国の現状に合わせた柔軟な政策が採られているというものであった。

服部氏に対する質問も、楊氏に対する1点目の質問と同様で、ロシアはどのような国際経済秩序を目指している、どのような役割を果たしたいのかというものであった。これに対して、服部氏は、ロシアが世界的覇権は狙っていないことは明らかだと回答した。プーチン大統領が目指しているのは、安保理常任理事国にEUを加えたくらいのメンバーがそれぞれ極となるような「多極世界」であり、ロシアはその一極を占めつつ自らの勢力圏を持つという構造だと説明した。

その後、オンライン参加者を含めたフロアの質疑応答があった。ソリス氏は自身への質問に答える形で、米国の対中追加関税が解除されなかったのは政治的な要因によると考えられることや、最近の米国のオンショアリング志向の政策はインフレ抑制に逆行するだろうとの見通しを示した。また、服部氏は日ロ貿易の展望についての質問に対し、レピュテーションリスクを考慮する大企業とは異なり、新潟などの地方を含めた中小企業はニッチビジネスを続けるだろうと回答した。また、米中対立のはざまにあるASEAN、韓国、日本などの立場に関する質問で、楊氏は中国は、周辺諸国が米中間で自国の利益を維持するためにバランスをとる考えであることを理解していると答え、ソリス氏は建設的な競争とゼロサム的な競争のバランスの問題だと指摘し、鈴木氏はASEANは米中競争の中でしたたかに両方から利益を得ようとしているという見方を示した。最後に、米国の半導体輸出規制が中国などの技術

開発を促進する可能性について、楊氏はその可能性を認め、そのことは米国にとっても世界的にも良くないとの意見を述べ、鈴木氏は米国は中国の勢いを止めて技術的ギャップを詰められないことを主眼に置いているのだと解説した。

これらの議論を踏まえ、最後に河合コーディネーターが自ら着目した点を提示した。技術開発の面では、米国は西側諸国と共に中国の技術発展を抑えつつ、自らの技術力を高めていくことが重要である。また、経済安全保障政策を展開する際に、規制的措置の対象を狭く限定することで、世界経済の落ち込みを避けていくことも重要である。例えば、インドやASEANなどのいわゆる中立国が、中国やロシアとも、また日本や米国とも取引をすることで、開かれた世界経済の秩序を管理していくことが必要だとの考え方が示された。

(ERINA 調査研究部長・主任研究員  
新井洋史)

## 〈農業・食料セッション〉 「農産物貿易の将来展望と北東アジアへのインプリケーション」

世界の急速な人口増加や地球温暖化による異常気象の多発が危惧される中、世界的な新型コロナウイルスの感染拡大とロシアのウクライナへの軍事侵攻により、食料安全保障と食料価格の高騰を巡る国際環境は不透明性を増している。そこで、安定的な食料供給確保、農産物貿易の円滑化、農産物価格の安定化がグローバルな課題になっている。

これらの背景を踏まえ、農業・食料セッション「農産物貿易の将来展望と北東アジアへのインプリケーション」では、北東アジア地域の農業や食品関連産業の発展に資することを目的とし、国内外の関連分野の専門家が集まり、世界全体と北東アジア各国の農業、食料需給の変化、農産物貿易の構造、農産物の価格変動などに関する現状認識と将来展望を議論した。

本セッションでは、日米中の5名の専門家からそれぞれ15分程の発言をいただき、引き続きコーディネーター新井洋史 (ERINA 調査研究部長・主任研究員)

から各パネリストに質問を投げかける形でディスカッションを行った。以下、順を追って発言のポイントをまとめていくこととする。

最初に登壇した国際食糧政策研究所(IFPRI) 主任研究員のマーティン・ウィル氏は「世界小麦市場に対する価格保持(政策)の影響」というテーマで、新型コロナウイルスの感染拡大とロシアによるウクライナへの軍事侵攻がもたらした小麦価格の高騰を考察しながら、それに伴い各国がとった国内小麦の価格保持政策(price insulation)が世界の小麦市場に与えた影響について議論した。マーティン氏の研究では、様々な政治的および経済的要因により、多くの国が国内小麦市場の価格を国際価格の変動から切り離していること、そしてこの価格保持政策が、新型コロナウイルスの感染拡大とロシアのウクライナへの軍事侵攻によって引き起こされた世界小麦価格の上昇の影響を拡大していることが明らかにされた。

次に、株式会社農林中金総合研究所理事研究員の平澤明彦氏は「日本の食

料輸入依存と食料安全保障」をテーマに、日本の農業の基礎的条件、食料安全保障施策と農業発展の課題について議論した。平澤氏は農地不足が日本の農産物国際競争力低下と大規模な食料輸入の根本的要因であることを指摘した。更に、日本の低食料自給率の背後にある農業発展の歴史的变化を体系的に解説し、国内外情勢が変化中、日本とヨーロッパ諸国の食料安全保障施策を比較しながら、国内生産基盤の維持と農産物の品目転換促進が日本の農業発展と食料安全保障の最重要課題であると結論づけた。

三番目の中国人民大学教授の唐忠氏は「2000~2021年における中国の農産物貿易」と題して、中国の経済発展と国内の食料需要、農産物貿易、国際農産物貿易ルールの不合理などを議論した。唐氏は中国の農産物生産は急速に増加しているものの、人口増加等により需要量の増加が生産量を上回り、中国は農産物純輸出大国から農産物純輸入大国になり

つつあるため、より大きな農業国際企業を擁して、農産物輸入を確保する必要性を指摘した。また、唐氏は既存の国際貿易ルールの不合理について議論し、大関関係の安定が国際農産物貿易の安定した発展を確保するための重要な要素であると主張した。

四番目に、香港貿易発展局日本首席代表ヤウ・ベンジャミン氏は「農産物の貿易の展望と北東アジアへの含意—日本産農産物の主要輸出先としての香港の事例」をテーマに、香港の経済的特徴と日本の農産物輸出の変化を考察しつつ、香港が日本の農産物、特にコメの主要な輸出先であることを指摘した。ヤウ氏は新潟米など多くの具体例を挙げながら、香港の人々の日本への愛情が、日本の農産物を香港消費市場で非常に魅力的にしていることと説明した。また、ヤウ氏は香港が持つ大湾区のハブとしての物流優位性を活かし、農産物貿易を含む越境EC（eコマース）の拡大が期待できることを強調した。

最後に、アクセンチュア株式会社シニアマネジャーの小栗史也氏は「国際的な食糧需給を見据えた日本 / 新潟からの農産物輸出の可能性」というテーマで、国際農産物市場、特にアジア市場を調査し、大・小ロット両輪による輸出拡大を提案した。小栗氏は鹿児島県の大吉農園のキャベツ輸出を例として、輸出における“チームづくり”の重要性を指摘した。また、小栗氏はコメ輸出拡大に向けた戦略コンセプトを分析し、“コメ+a”のセット輸出の提案しつつ新潟港の輸出利用可能性などを提示した。

各パネリストからの発言に続くQ & Aの段階で、各パネリストと新井コーディネーターとの間で質疑応答が行われた。コーディネーターは、マーティン氏の報告の中で、小麦など他の穀物と比べたコメ価格の安定が示されていたことから、「コメ」を

キーワードとして、主に2つの側面から質問をした。一つ目は、コメに対する小麦の相対価格が高い状態が中長期的に続く場合、小麦からコメへの消費シフトが起こる可能性について、マーティン氏、小栗氏、ヤウ氏に質問した。二つ目は、コメに対する相対的な小麦価格の上昇が日本、中国の食料自給率に与えるインパクトについて平澤氏と唐氏に質問した。

一つ目の質問に対して、マーティン氏は消費には慣性があるので短期的なシフトは考えにくい、世界的な穀物在庫量や生産量と価格との相互作用の中で、コメと小麦の価格差が長期的に続く場合には、小麦からコメへの消費シフトの可能性があるかと答えた。小栗氏は、米粉から作ったパンや麺などの事例を挙げて、コメと小麦の価格差の影響で海外穀物消費市場の構造転換の可能性があるかと主張した。ヤウ氏は米の加工品の開発や輸出は市場構造の転換を促すための有利な手段となり得ると認めたが、日本産米などの加工品の海外輸出拡大は価格競争力があるかどうか重要な前提となることも指摘した。

二つ目の質問に対して、平澤氏は穀物の相対的な価格変動によってコメの消費量が上がれば、確かに日本の食料自給率は上がるが、ヨーロッパを例にあげつつ、主食を小麦からコメに変えるのは短期的には難しいとの考えを示した。唐氏は所得分配別のグループの観点から、小麦価格の上昇にもかかわらず、短期的に主食の構造を変更することは非常に困難だと指摘した。更に、一国の食料自給率、すなわち食料輸出入の状態は、主にその国の一人当たり農地によって決定されるため、穀物相対的価格の変動は中国の食料自給率を根本的に変えることはないかと主張した。

その後、フロアとの質疑応答があった。NICE 実行委員長・ERINA 代表理事の

河合正弘は、マーティン氏に対して各国の国内小麦価格維持政策が世界小麦市場の需給に及ぼす影響について、また、唐氏に対して国際農産物貿易ルールの不合理が中国の食料安全保障に及ぼす影響について質問した。これに対して、マーティン氏は各国の国内小麦の価格維持政策が実際にゼロサムゲームであることを指摘した。つまり、一国の価格維持政策はその商品の国内消費と輸入を拡大し、それによって国際市場価格を高め、他の国の消費を減少させる可能性が高くなる。唐氏は既存の不合理な国際農産物貿易ルールにより、農業生産を刺激する手段が制限され、それによって中国の食料安全保障に負の影響を与えていると主張した。新潟の食品製造加工業の蔡聖錫氏は蒲鉾を例として、新潟産の農林水産物の中国などへの輸出制限について質問した。小栗氏は新潟県産品の輸出規制は国や市場によって異なるが、長期的な見通しは悪くないと解説した。

各パネリストからの発言と質疑応答を踏まえ、最後にコーディネーターが要点をまとめた。食料安全保障が重要な課題となり、食料価格が高騰する国際環境の中、日本産・新潟県産コメの海外市場拡大の可能性について触れ、理論的には小麦価格が上がり、コメ価格が安定していれば、小麦からコメへの消費シフトが起こることが予想されるものの、現実には様々な原因で短期的に主食消費構造の転換は難しいという形で一連の議論を総括した。今回の「農業・食料セッション」の発言と議論を通じて、開催地・新潟を含む北東アジア各地域への地域農業振興、食料安全保障、国際食料貿易に有益なインプリケーションが得られたものと考えられる。

(ERINA 調査研究部研究員  
董琪)

## 〈エネルギー・環境セッション〉 「共に目指すカーボンニュートラルの実現」

国連気候変動枠組条約 (UNFCCC) のパリ協定は、世界の平均気温の上昇を産業革命以前と比べて2℃未満、できれば1.5℃未満に抑えるという目標を掲げ

ており、各国はこの世界的な取り組みに対し、「国が決定する貢献 (NDC)」を設定している。ほとんどの国が以前よりも高い目標を掲げているものの、2030年の

世界総排出量は、本来ならば43%の削減が必要とされているところ、2019年比でわずか0.3%の減少となる見込みである。また、歴史を遡ってこれまで大気中

に蓄積された排出量を踏まえ、いかなる水準であれ、地球温暖化を食い止めるためには、今世紀半ばまでにネットゼロを達成することが必須条件となっている。したがって、より野心的なNDCを策定すると同時に、一国だけでは限界があるため、国際的協力が不可欠となる。そこで、このセッションの標題を、「Together for Carbon Neutrality (共に目指すカーボンニュートラルの実現)」とした。

ソウル大学校客員教授の呉大均(オ・デギョン)氏は、パリ協定と炭素市場の協調的取り組みについて発表した。呉氏は、気候変動に関する国際協力におけるUNFCCCの「共通だが差異のある責任」の重要性に触れ、京都議定書の柔軟な制度は、温室効果ガス(GHG)排出削減における先進国の負担を軽減し、市場制度の活用と途上国との協力、世界統一炭素市場の設立を意図したものであったと強調した。しかし、現実には、炭素市場は域内・国内市場という形をとった。最初の域内炭素市場は欧州排出権取引制度で、すでにEUの温室効果ガス総排出量の約45%をカバーしている。韓国は2015年から全国規模で炭素市場を運営し、国の温室効果ガス排出量の70%をカバーしている。

呉氏は、パリ協定と京都議定書の特徴は異なるものの、パリ協定のさらなる協調的取り組みはクリーン開発メカニズム(CDM)の経験が基になっていることを指摘した。北東アジアには、異なるNDC目標、政策、炭素価格レベル、既に構築された経済関係を活用して、GHG排出削減プロジェクトをさらに拡大させていく可能性が存在する。さらに、地理的に近く、経済的に結びつきの強い北東アジアで自主的に炭素市場を拡大していくことも、カーボンニュートラルに向けた協力領域である。自主的な炭素市場は急成長しており、各国のNDCがカバーしていない領域で重要な役割を果たす可能性がある。

モンゴル環境観光省気候変動研究協力センター首席科学顧問のバトジャルガル・ザンバ氏は、モンゴルのGHGネットゼロ目標とその実現可能性について見解を述べた。エジプトで開催されたCOP27では、モンゴルの大統領が2050年のネット

ゼロ目標を初めて発表した。モンゴルはNDCにおける2030年の目標を控えめに設定しており、ネットゼロ目標の達成は極めて難しい。エネルギー部門と畜産業を中心とする農業部門は温室効果ガスの主な排出源となっている。しかし、国内のエネルギー生産は需要増に追いつかず、その一方で家畜の数は増え続けている。モンゴルの家畜は、重要な収入源であるだけでなく、地域社会にとって最も長く継続されてきた伝統的な生活に欠かせないものでもある。したがって、近い将来にこれらの部門からの大幅なGHG排出量削減は期待できず、ネットゼロ目標に貢献することは難しい。そのため、吸収源、GHGの除去、炭素貯留を促進することに現在注目が集まっている。

バトジャルガル氏は、北東アジアでのカーボンニュートラルに向けた協力において、モンゴルは積極的な役割を果たすことができると強調した。例えば、エネルギー送電網の統合や、発電と電力消費のバランス調整、グリーン水素の製造、林業などがある。モンゴルは最近、植生陸地面積が拡大し、地球温暖化に対する生態系の回復力が高まる相乗便益を期待し、2050年までに10億本の植樹を行う国家キャンペーンを開始した。バトジャルガル氏はさらに、モンゴルのネットゼロ目標の実現可能性の評価には複雑な科学的分析が必要であり、これをネットゼロ戦略やロードマップ策定の際の基準として使うべきであると指摘した。

一般社団法人海外環境協力センター研究員の渡辺潤氏は、カーボンニュートラルの実現に向けたパリ協定第6条に基づく日本の国際連携に関するイニシアチブについて報告した。渡辺氏は、パリ協定第6条4項はCDMの後継制度として中央管理型メカニズムを設定したが、実際の運用は2024年以降になる見込みであることに言及した。日本では第6条2項に基づくメカニズムのルールを検討中だが、2013年には自主的なメカニズムである二国間クレジット制度(JCM)の運用を開始済みである。スイスも同様の取り組みを行っている。このメカニズムは、途上国にとっては脱炭素技術やソリューションの導入、外部資金へのアクセス、相乗便益によるSDGs

達成への貢献などの利点をもたらす一方、先進国にとってはNDC目標の達成、脱炭素技術・ソリューションの海外展開を支援し、より費用対効果の高い気候変動緩和対策を行う手助けとなる。国際排出量取引協会の調査によると、パリ協定第6条を活用することで、NDCの達成に必要な費用を半減できる可能性がある。日本は現在、25カ国とJCMに協力しており、このメカニズムを通じて1億トンのGHG排出削減を目指すとともに、自国の努力で2030年までに46~50%削減することを目標としている。日本の環境省は、エネルギー効率と再生可能エネルギーに重点を置き、JCMプロジェクトに対して補助金制度を実施している。モンゴルでの6つのプロジェクトを含め、17カ国で200以上のJCMプロジェクトが既に承認されている。廃棄物管理や輸送部門でも取り組みが始まっている。さらに、渡辺氏は、最近開催されたCOP27で日本が立ち上げた「パリ協定6条実施パートナーシップ」について説明した。このパートナーシップは、情報共有や取組支援によるキャパシティビルディングとし、40カ国および23機関が参加を表明している。

欧州森林研究所首席科学研究所員のサフォーフ・ゲオルギー氏は、新しい地政学的状況におけるロシアの脱炭素化の道筋について見解を述べた。2021年に発表された国連環境計画(UNEP)の評価によれば、現在の気候政策のままでは、2050年の炭素排出量の2020年比の削減量は約10%となってしまう、その結果、66%の確率で2.7℃の温暖化がもたらされることになる。ネットゼロのシナリオ案でも2020~2050年で45%の排出量しか削減できず、66%の確率で2.2℃の温暖化がもたらされてしまう。したがって、現行の排出削減の道筋ではパリ協定目標を達成することはできない。大量排出してきた国々のさらに強力な取り組みが必要である。

ロシアは、2060年までのカーボンニュートラル達成を表明している。1990~2020年で52%の炭素排出量を削減したものの、2030年に向けた公約は、現状の水準より45%増加するという非常に貧弱なものである。このような時代遅れの目標は、ロシア政府が2021年に採択した「2050年

までの低炭素排出開発戦略」と矛盾している。サフォーノフ氏は、膨大なグリーンエネルギー資源の活用、ゼロエミッション輸送への切り替え、商用・住居用ビルのエネルギー効率の向上、木質系材料・製品の生産拡大など、ロシアが持つさまざまな可能性を強調した。ロシアにとって、2050年までに2010年比で80~90%の二酸化炭素排出量を削減することは実現可能であり、主に資本投資として年間GDPの1%程度の費用にとどまるであろう。

しかし、2022年2月以降の劇的な変化は、ロシアの気候政策と脱炭素化計画に全く異なる事情をもたらした。主要産業（石油・ガス、石炭、金属など）に対する国際的な制裁と関連部門（運輸、発電など）への影響は、経済活動を大きく低下させることにつながるであろう。経済発展省の悪化シナリオによると、2023年と2024年にロシアのGDPは11%以上縮小する可能性がある。専門家は、原油生産が50%以上、ロシアからの石炭輸出が47%、天然ガス輸出が40%減少するなどの損失が生じると予測している。こうした経済の混乱によって、今後数年間で国の温室効果ガス排出量は現状を20~30%下回り、2030年までにはこの水準で安定する可能性がある。さらに、サフォーノフ氏は、ロシアがパリ目標を実現するためにはグリーン・トランジションが必要不可欠であることを強調した。しかし、政治的・経済的環境の改善なくして、地球規模の気候変動危機の防止へ貢献することはできないであろう。

アグラ・エナギーヴェンデ欧州エネルギー政策統括部長のブック・マティアス氏は、欧州グリーンディールについて報告した。EUは2019年12月に、経済の近代化と革新を組み合わせ、遅くとも2050年までにカーボンニュートラルを達成するという政治的戦略を発表した。2020年9月には、EUは2030年までにGHG排出量を2015年比で55%削減させるという法的拘束力のある目標を設定し、同時に、エネルギーミックスにおいて再生可能エネルギーの割合を45%にするという目標を掲げた。2021~2027年の公共・民間投資額は890億ユーロに達する見込みである。ロシアのウクライナ侵攻の影響により化石燃料が値上がりしたことで、こうした移行は加速した。一方、カーボンプライシングの指標としての力はさらに強まっており、EUの炭素市場は既にこの地域のGHG総排出量の45%を占めている。

長岡技術科学大学大学院情報・経営システム系教授の李志東氏は「中国における脱炭素とエネルギー安定供給の両立に向けた取組みの動向と課題」と題して報告を行った。脱炭素とエネルギー安定供給の両立は世界全体の課題であり、中国も例外ではないことに触れ、中国の国際公約としての「3060目標」について説明した。

「3060目標」は、中国が二酸化炭素排出量を2030年までにピークアウトさせ、温室効果ガス排出量を2060年までに実質ゼロとする脱炭素目標を指す。これは、習

主席が2020年9月の国連総会で公表し、政府が2021年10月に国連に提出した長期低排出発展戦略で明記された目標である。注目すべきは、炭素排出ネットゼロの目標達成時期は先進国が目指す2050年より10年遅いものの、CO<sub>2</sub>ピークアウトからの期間が先進国よりも短く設定されていることや、2020年の自主行動計画目標を超過達成し、実現可能性が十分に考慮されていることである。さらに、脱炭素は中国の持続可能な発展にとっての内的要求であると認識し、「3060目標」を国際公約として位置付け、国家の威信を掛けて達成しなければならないとしている。

これらの5カ年目標を達成できたとして、国連に提出した2030年のNDC目標には、2026年以降の5年間、非化石エネルギー比率をさらに年間1ポイントずつ引き上げ、排出原単位を年率3.5%以上低減させる必要があることを明言したが、決して簡単ではない。この5カ年計画目標のうち、GDP当たりのエネルギー消費量とCO<sub>2</sub>排出原単位の削減、非化石エネルギー比率の上昇など、「拘束力のある目標」はいずれも達成されるであろう。

さらに、李氏は、最近の異常気象による中国の石炭火力発電への回帰は一時的であり、安定供給と脱炭素に関する2025年の計画目標は達成可能であると考えていることを強調した。

(ERINA 調査研究部主任研究員  
エンクバヤル・シャグダル)

## 〈総括講演〉

## 「分断が進む世界経済—北東アジア地域の課題と展望」

NICE 実行委員長・ERINA 代表理事 河合正弘



「2022年度北東アジア経済発展国際会議（NICE）イン新潟」の特別講演とそれに続くセッションを踏まえて、北東アジア経済と分断が進む世界経済の現状をどのように捉えるべきかについて話したい。

## 【北東アジア諸国経済の成長と課題】

まず、北東アジア地域では経済成長が続いているが、それぞれの国や地域に多くの課題があることを指摘する。最も重要な課題は、世界経済の分断が進む可能性があることであり、世界はそれにどのように対応し、日本は其中でどのような役割を果たせるのかが問われている。

図1の左のグラフは北東アジア諸国のGDP（兆米ドル）を表している。1990年代には、中国は既に改革開放を軌道に乗せ経済発展を進めており、2001年に世界貿易機関（WTO）に加盟した。その後も経済成長を続け、2010年には日本のGDPを抜いて世界第2の経済大国になった。この間、日本のGDPは上昇傾向を示さないまま推移している。旧ソ連邦崩壊後のロシア経済は経済体制移行期の1990年代に混乱したが、2000年代初めに成長

が軌道に乗り、世界金融危機（2007-09年）で一旦下降した後回復して2010年代の前半まで伸び、その後は低迷している。韓国は1990年代末に金融危機を経験したが、その後は順調に成長している。モンゴルと北朝鮮のGDPは規模が小さいので、この図では目に見えるかたちで示されていない。モンゴルは成長しているが、北朝鮮はあまり成長していない。

図1の右側は一人当たりGDP（米ドル）を示している。日本の一人当たりGDPは高水準（4万ドル前後）で推移してきたが、2022年には下っている。韓国の一人当たりGDPは急速に伸び、2022年は日本と韓国がほぼ並ぶ状況になっている。

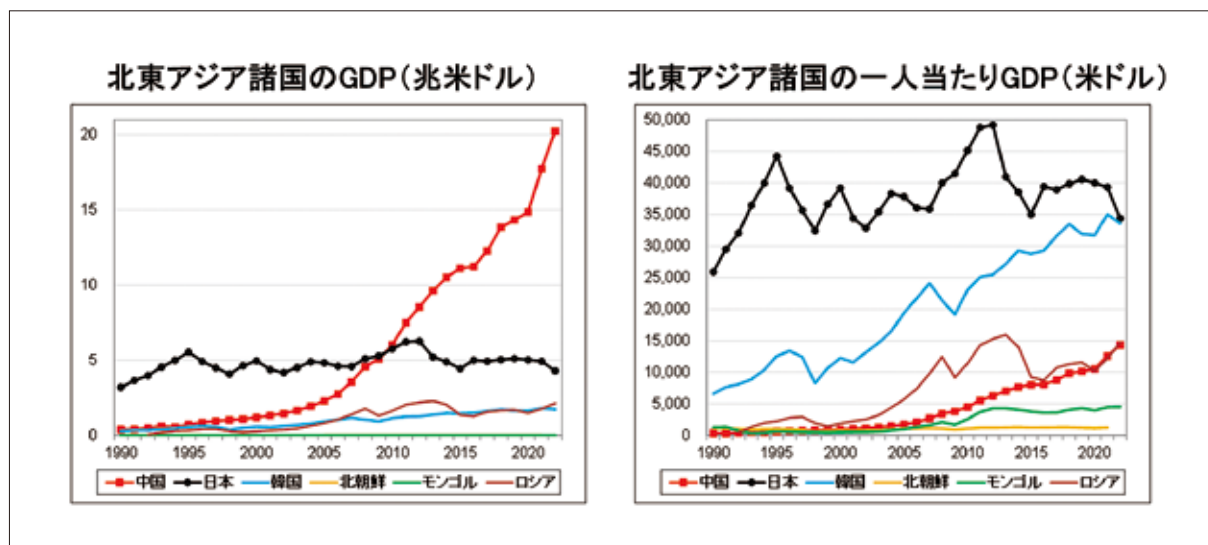
ロシアの一人当たりGDPは2010年代前半までは韓国に次いで伸びていくと見込まれていたが、2010年代以降低迷している。これは、鉱物資源の価格に依存する経済構造になっていること、2014年のクリミア併合で西側諸国の経済制裁が始まったことが影響している。中国の一人当たりGDPは成長し続け、2020年前後からはロシアとほぼ同じ水準になっている。中国の一人当たりGDPは2023年には世界銀行が決める

高所得国のカテゴリーに移る可能性が高くなっている。世界銀行は一人当たり国民所得が1万3200ドル以上の国を高所得国としている。中国は発展途上国の段階を卒業することになる。モンゴルの一人当たりGDPは2010年代初めまで伸びたが、それ以降は停滞し伸びていない。北朝鮮経済は一貫して低迷している状況だ。北朝鮮は国連による厳しい経済制裁下にあるだけでなく、厳格なコロナ対策をとり、かつ自然災害に見舞われるという「三重苦」で経済的に苦しい状況にある。

このように、北東アジア経済は伸びている国と停滞している国が併存している。中国がゼロコロナ政策から脱却し、日本や韓国が国際的な人の流れを活性化させ、北東アジア地域全体が貿易投資を拡大させていくことが、ポストコロナ時代に向けた大きな課題である。

北東アジア各国はそれぞれ重要な構造的な問題を抱えており、構造改革に努めつつ経済成長を図っていく必要がある。日中韓の少子高齢化問題は極めて深刻であり、ロシアも少子高齢化問題に直面している。中国の人口は2021-22年がピーク

図1 北東アジア諸国のGDP、一人当たりGDP（1990-2022年）



出所：IMF, World Economic Outlook October 2022; Bank of Korea, Gross Domestic Product Estimates for North Korea, various issues より筆者作成  
注：2022年のデータはIMFによる予測値。

で、今後は減少していくことになる。中国の生産年齢人口（15-60歳未満）は既に減少を始めている。こうした状況では、労働者一人当たりのGDP（労働生産性）を伸ばさないと経済成長ができない。日本、韓国、中国そしてロシアが同じ状況に面している。

ロシアは2022年2月のウクライナ侵攻を経て西側諸国（米欧日）による経済制裁を受けており、北朝鮮は国連を中心にした経済制裁下にある。北東アジア地域の最大の課題は、米中間の大国間競争が北東アジア諸国、特に日本や韓国の対中関係に大きな影を落としていることだ。大国間競争が世界経済の分断に繋がる恐れがあることから、米中関係の動向に注目していかなければならない。

【世界経済の分断の可能性】

世界経済の分断は、ロシアによるウクライナ軍事侵攻を受け、西側諸国（G7諸国、EU）がロシアを西側経済から切り離そうと制裁を科しているの、既に起こりつつある。それに加えて米中間の大国間競争が世界経済の分断をさらに進める可能性がある。米中対立は、トランプ政権の下で米中貿易戦争のかたちで起きていたが、バイデン政権の下でも、貿易、技術、安全保障に関わる摩擦から価値観（民主主義、人権）や台湾海峡をめぐる対立に拡大してきた。

米中対立がさらに深刻化したり、中口の政治・軍事・経済的な連携がさらに深まったりすると、世界経済は米欧日と中口の分断に繋がるリスクがある。

米国は2022年10月、国家安全保障に係る最先端半導体関連の対中輸出規制を強化しサプライチェーンの強靱化を進めている。米国は、米国の技術やソフトウェアを使った半導体と半導体製造機器の対中輸出を許可しない姿勢を示している。最先端半導体は中国の軍事力強化につながり、米国の安全保障を脅かしかねないからだ。オランダや日本の企業は半導体製造機器に国際競争力を持っているので、それら企業が米国の輸出規制の網に組み入れられる可能性がある。

世界経済の分断は、経済的な効率性を低下させ、生産コストの高騰を招くため、経済的な観点からは避けるべきものだ。しかし、各国とも国家安全保障の確保に努めなくてはならず、経済と安全保障のバランスを取ることが必要になる。

世界経済が主要先進国（米欧日）と中口の経済ブロックに分断された場合、その経済的な影響はどのようなものになるか、世界経済の分断のコストを最小化するには何が必要か、経済安全保障はどこまで進めるべきか、日本は中国とどう向き合うべきかが問われることになる。

世界経済分断のシナリオと経済的な影響については、国際通貨基金(IMF)の報告

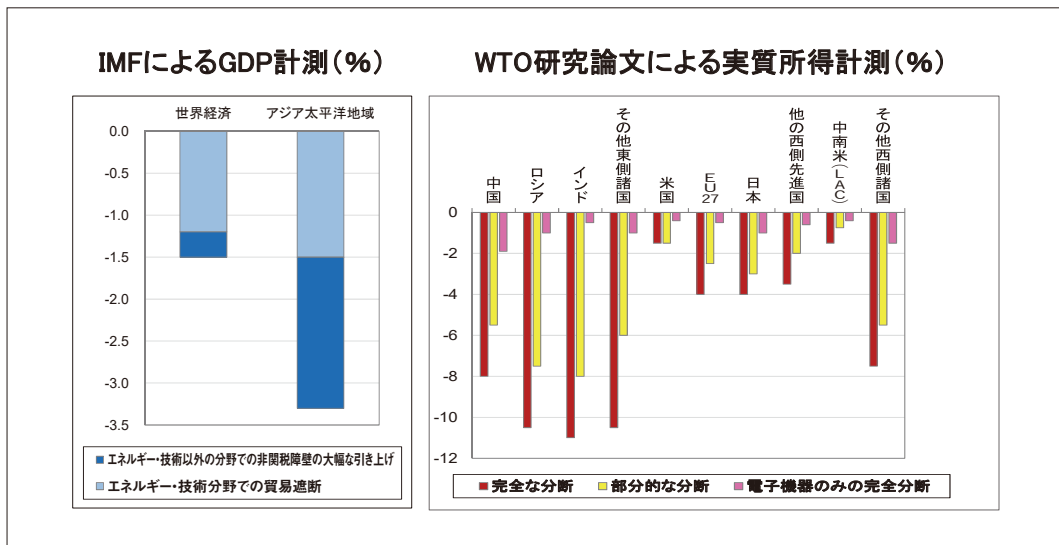
書や世界貿易機関(WTO)の研究論文が分析している(図2)。世界経済は西側(米欧日)と東側(中口等)に分断されると定義し、本格的な世界経済の分断が起こる場合、部分的な分断が起こる場合、そして電子機器の分野に限った分断が起こる場合が想定されている。

これらの分析によれば、世界経済の本格的な分断が起きると国際的な人の流れが阻害され、情報・知識・技術・アイデアの流れが遮断されるためマイナスの影響が極めて大きくなる。それは、西側と東側の経済的な相互依存が極めて高いことの裏返しである。分断のマイナスの影響は、中国やロシアにとっては非常に大きい、西側にとっては比較的小さい。それは、西側の持つ技術水準が高いのに対し、東側にとっては西側の知識・技術・アイデアへのアクセスを遮断されることの不利益が大きいためである。

その一方、世界経済の分断が部分的なものであったり、電子機器などハイテク分野に限られたものであったりする場合には、マイナスの影響が小さくなる(図2の右側)。つまり、本格的な分断のコストは、部分的なハイテク分野での分断のコストを上回る。

したがって、経済安全保障の観点から輸出規制など分断を避けられないとすれば、その対象や範囲をなるべく効果的な分野に絞り、経済全般に広がらないように

図2 世界経済の分断がもたらす経済的な影響



出所: (左)IMF, Regional Economic Outlook, Asia and Pacific: Sailing into Headwinds (October 2022). (右)Goes and Bekkers, "Impact of Geopolitical Conflicts on Trade, Growth, and Innovation." Staff Working Paper ERSD-2022-09, World Trade Organization (04 July 2022).

して、コストを小さくすることが重要だ。米欧日は、貿易や投資の幅広い制限をするのではなく、限られた分野での経済安全保障の施策をとりつつ、自らが技術革新を進めて安定的な国際貿易システムの再構築を目指すべきだろう。要するに、世界経済、北東アジア経済の発展のためには、本格的な分断を回避することがベストであり、仮に安全保障の観点からある程度の分断が避けられない場合でも、それを最小化するよう管理していくことが重要だ。

### 【日本は中国にどのように向き合っていくべきか】

日本は中国との間で建設的かつ安定的な日中関係を維持していくことが課題になっている。

2022年11月の岸田文雄・習近平会談では、以下の共通認識が共有された。

日中関係は重要であり、建設的・安定的な日中関係を維持して、経済や国民交流など互恵的協力を進める。環境・省エネを含むグリーン経済や医療・介護・ヘルスケアの分野での協力を強化する。企業にとって公平で差別のない予測可能なビジネス環境を提供する。青少年を含む国民交流を再活性化させる。世界と地域の平和と繁栄を共に維持する責任を負い、世界的な課題への対応に努める。

日中両国は、これらの共通認識を実行に移していくべきだ。米中は大国間競争にあるものの相互の間での本格的な経済分断を避けることが望ましく、そのためにも日中は経済協力を進める意味がある。日本としては、経済安全保障の対象分野が過大なものにならないよう管理し、通常の経済活動の活性化のために、日中経済協力を進めていくべきだ。

日本の多くの企業が中国に進出している中で、中国が国内における透明性・予見可能性を高め、公平なビジネス環境を確保することが欠かせず、そのための政策対話が必要になっている。

また、日中間には、少子高齢化、医療・介護・ヘルスケア、所得格差、不動産バブル、地方財政といった共通する国内課題がある。意見交換をしながら課題への取り組みを進め、貿易・投資を活性化させていくことが重要だろう。貿易・投資面では、

地域的な包括的経済連携（RCEP）を高いレベルに移していくための協議、環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定（CPTPP）に向けた政策対話・事前協議、WTO改革に向けた日中の政策対話を行うことが考えられる。国際的な課題——気候変動、感染症対策、途上国の債務問題など——についても日中で経済協力を進めるべきだ。

米中が相互の大国間競争を管理して軍事対立を避けるためにも、日中間の経済協力は補完的な役割を果たさう。

日中間の政治関係が安定化しないと、経済的な関係も安定しない状況になっている。以前は「政冷経熱」が可能だったが、今は「政冷」が「経冷」になりやすく、政治的な関係を安定化させることが重要だ。日中関係が安定すると北東アジア地域の経済情勢も改善していくと考えられる。

### 【2022年度北東アジア経済発展国際会議（NICE）総括】

2022年度 NICE では、全体テーマを「分断が進む世界経済—つながりを求めて」として経済安全保障、農業・食料、エネルギー・環境などの各分野で専門家による議論を行った。世界レベル、そして北東アジア地域での国際協調、特に国際経済協力の可能性を探った。総括講演では、北東アジア経済の現状と世界経済の分断を避けるための課題について話した。第4回 Future Leaders Program (FLP) では、国内の大学生が「北東アジア地域の未来シナリオ」について議論した。将来を背負う若者による議論は重要であり、今後も続けていただきたい。

2023年3月31日をもって、公益財団法人環日本海経済研究所（ERINA）は解散し、4月1日から新たな組織となるので報告させていただく。

公益財団法人環日本海経済研究所（ERINA: Economic Research Institute for Northeast Asia）は、新潟県をはじめとする11の県、新潟市、民間企業8社の出捐によって、1993年に設立された。1990年代初めの旧ソ連構成諸国の市場経済化の動きを機に、既に改革開放路線をとっていた中国だけでなく、ロシア、

モンゴル、北朝鮮も経済改革と市場開放を進め、これら諸国と日本、韓国との間の経済的な結びつきが強まることが期待された。こうした期待を受け、北東アジア地域を対象とした研究所が新潟に設立され、日本海を挟んで日本と他の北東アジア諸国との経済交流を促進することで地域経済圏を形成するという壮大なビジョンが示された。

ERINA はその後30年にわたり、北東アジア地域の経済発展と域内経済協力の強化に向けて、域内各国の経済動向・対外経済関係を調査研究し、域内経済交流の活性化のための支援や、経済・ビジネス情報の対外発信に取り組み、「シンク・アンド・ドゥ・タンク」として政策の方向性を示す活動を展開してきた。特に中国の東北地域、ロシアの極東地域、韓国、北朝鮮、モンゴルに焦点を当て、域内の経済的な相互依存関係、国際運輸・物流、貿易・投資、資源・エネルギー・環境、開発金融、人的交流などの分野に力を入れてきた。おかげで、ERINA は北東アジア地域経済の調査研究と経済交流支援の機関として、内外で高い評価を得ることができた。

設立30年の節目を迎え、この度、新潟県の行財政改革の方針により、2023年3月末で公益財団法人としては解散し、同4月1日から公立大学法人新潟県立大学に新設される附置研究所「北東アジア研究所」（ERINA: Economic and Social Research Institute for Northeast Asia）として再出発することとなった。現有の研究員のすべてと非研究職員の大半が移籍し、研究所の発展に寄与すべく研究活動に邁進するとともに、広域的な産学連携を推進する。これまでの研究蓄積や人的・情報ネットワークをそのまま引き継ぎ、北東アジア地域経済の研究拠点、広域的な産学連携のハブとしての役割を一層高めていく。

今後の NICE については、新潟県をはじめ行政機関とともに連携しつつ続けていきたいと考えている。

長きにわたり、ご支援、ご協力を賜った国内外の研究者・研究機関、政策担当者・行政機関、経済界、言論界、市民の皆様にも深く感謝申し上げます。

# 大学生・大学院生のプレゼンテーションコンテスト 第4回 Future Leaders Program (FLP) —北東アジア地域の未来シナリオ—

2022年度北東アジア経済発展国際会議(NICE)の第2日目(12月16日)に大学生・大学院生のためのプレゼンテーションコンテスト「第4回 Future Leaders Program (FLP)」が開催された。

テーマは「北東アジア地域の未来シナリオ」。大きな経済発展可能性とともに政治・社会的な不安定要素も併せ持つ北東アジア地域の将来に向け、学生たちが自由な発想でシナリオを描くことで未来のオピニオンリーダーを育成することを目的としたFLPは今回で4回目となった。テーマを「北東アジア」から「北東アジア地域」に変更し、より広い地域への視野を含んだ提案も可能とし、日本国内の大学、大学院を対象とした。県内外大学から19の提案があり、書類選考を経て5チームが本選に臨んだ。

### <本選出場チーム>

1. 新潟大学「Happy Ageing ～日・中・韓共同介護プラットフォームの提案～」  
小山内哲、山岡詩、渡邊剛
2. 富山大学「電子廃棄物のマネジメントから考える未来シナリオ～日韓E-Wasteマネジメントネットワーク構想～」清水日向
3. 東北学院大学「FOOD FOR THE POOR ～COOLをお届け～」  
植木太陽、大友心愛、岡本昇樹

4. 東北大学「日中韓で目指す環境にやさしい太陽光発電」  
中尾春貴、大石真士
5. 新潟大学「北極海航路と日本海経済」  
岡野壮一郎

### <本選審査員>

新潟経済同友会国際戦略委員副委員長  
高橋秀之  
新潟日報社取締役統合編集本部論説編集委員室長  
森沢真理(書類審査員)  
在新潟モンゴル国名誉領事  
中山輝也  
長岡大学教授  
権五景  
新潟中華総商会副会長  
曾衛斌  
新潟経営大学観光経営学部長・教授  
ツェリツェフ・イワン  
新潟県知事政策局国際課長  
小田佳代子(書類審査員)  
NICE 実行委員長・ERINA 代表理事  
河合正弘(書類審査員)

※書類審査では、新潟経済同友会国際戦略委員会の宇尾野隆委員長に審査員をしていただいた。

### <本選ルール>

プレゼンテーション7分、質疑応答8分

### <表彰>

新潟県知事賞(1チーム)、  
審査員特別賞(1チーム)、  
奨励賞(3チーム)

新潟県知事賞は東北大学の「日中韓で目指す環境にやさしい太陽光発電」、審査員特別賞は新潟大学の「Happy Ageing～日・中・韓共同介護プラットフォームの提案～」だった。学生たちからは「北東アジアの将来を危機感を持って考えることができた」「今後もこれらのテーマについて知見を深めていきたい」などの感想が寄せられた。また、同日開催のエネルギー・環境セッションに参加し、「専門家によるパネルディスカッションを初めて体験し貴重な経験となった」という感想もあり、国際会議のプログラムのひとつというのも未来を担う学生の経験値を上げたのではないかと思う。学生たちの考えた未来シナリオが将来の北東アジア地域の平和・安定・繁栄に何らか寄与することを願う。

(ERINA企画・広報部長  
新保史恵)

